

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷九十二第

行發日一月七年四和昭

論叢

消費稅の目的及物體

法學博士

神戸 正雄

勞銀の理論

文學博士

高田 保馬

說苑

ケネーの租稅理論

法學士

山口 正太郎

セイの販路說に就て

經濟學士

谷口 吉彦

シユピイトホフの景氣循環論

經濟學士

靜田 均

講演

我國民經濟の實相

法學士

山室 宗文

雜錄

再び佐田介石に就いて

經濟學博士

本庄 榮治郎

プロイセンの地方稅制

經濟學士

安田 元七

動大量と靜大量

經濟學士

木村 喜一郎

晩近フランス經濟學界の傾向

經濟學士

松岡 孝兒

最近英國に於ける豫算の業績

經濟學士

中川 與之助

近著外國經濟雜誌主要論題

シュピイトホフの景氣循環論 (上)

靜 田 均

一 緒 言

資本家的社會の經濟生活は、好景氣と不景氣の周期的循環を描くべく運命づけられてゐる。好景氣より不景氣への轉換に伴ふ恐慌は、この景氣循環の一段階に外ならない。そしてかやうな景氣循環の特殊の一断面である恐慌から、吾々の科學的注意の方向を景氣循環の總過程にむけしめたことは、まことにクレマン・ヂュグラの功績である。恐慌それ自體を孤立的現象として考察するに止まつた固有の恐慌理論は、かくして、これをその循環性と全體性において把握する近代のいはゆる景氣理論にまで發展する可能性を與へられた。恐慌および景氣循環の理論的説明を志す今日の國民經濟學者たちは、いづれもこの軌道に沿うて走つたものである、と云ふことが出来る。

同じやうな先驅者をドイツに求めるならば、吾々はまづ、恐慌を資本蓄積過程の一契機として理解したかのマルクスを想起しうるであらう。彼にあつては、恐慌論はむしろ蓄積論より導き出さるべき系としての意義を有するにすぎない。それはともあれ、こうした問題の轉換および研究

- 1) Element Juglar: Des Crises Commerciales et de leur retour périodique (1862).
- 2) A. Löwe: Der gegenwärtige Stand der Konjunkturforschung in Deutschland. (Brentano Festgabe. II. Bd.)

領域の擴大は、不幸にしてその後久しいあひだ有力な追隨者を見出さなかつたために、本來の多産性を阻まれてゐた。それが一般的傾向として學界を風靡するに至つたのは、ほん今世紀の初頭以降のことに屬する。爾來、多くの學者によつてそれ／＼の立場から問題解決の權威ある試みが提示されたが、私はこゝにその最もすぐれたる雛型の一つとして、シュビイトホンを取扱つて見たいと思ふ。

恐惶および景氣問題に關聯して、これまで彼が發表した述作は、一九〇二年『シユモラー年報』誌上に公けにした彼れの處女作論文『生産過剩說序論』よりこのかた、すでに相當の數に上つてゐる。試みに主もな文献を年代順に列擧すれば、おほよそ次ぎの如くであらう。

- 1) Vorbemerkungen zu einer Theorie der Überproduktion (Schmollers Jahrbuch, Bd. 26, 1902)
- 2) Die Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky und L. Pohle (Schmollers Jahrbuch, Bd. 27, 1903)
- 3) Beiträge zur Analyse und Theorie der allgemeinen Wirtschaftskrisen, 1905.
- 4) Die Quantitätstheorie, insbesondere in ihrer Verwertbarkeit als Hausethorie (Festgaben für Adolph Wagner, 1905)
- 5) Die äussere Ordnung des Kapital- und Geldmarktes (Schmollers Jahrbuch, Bd. 33, 1909)
- 6) Das Verhältnis von Kapital, Geld und Güterwelt (Schmollers Jahrbuch, Bd. 33, 1909)
- 7) Der Kapitalmangel in seinem Verhältnis zur Güterwelt (Schmollers Jahrbuch, Bd. 33, 1909)
- 8) Die Krisenarten (Schmollers Jahrbuch, Bd. 42, 1918)
- 9) „Artikel Krisen“ im Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl.

これによつてもはゞ明かな如く、彼れの半生の學的的努力は殆んどこの問題の解決に捧げられたやうに見える。さうしてその間に彼れの所説の内容が、他の理論家の批評と影響のもとに、次第に純化し發展したことは當然である。しかし、その歴史的進化を跡づけることは、必ずしもいま私の所期するところではない。こゝでは單に、彼れの見解の基線を書きつけて、それに私見の一端を添えようとするにすぎない。吾々はむしろ最近の彼れの主張に重點をおかうと思ふ。そしてこの目的のためには、彼れの前掲論文『恐慌』を中心とすることを以て好適とするであらう。なせなら、この價值多き論文こそは、現在のところでは、最近時に吾々に與へられた彼れの包括的述作であるから。二十年の久しきにわたつて根氣よく同じ坑道を掘りつゝけた彼が、いまや如何なる鑛脈に達したかは、この一篇によつてはゞ評價しうるやうに思はれる。

二 根本諸概念および標準的循環の表式

ジュニイトホフは、一般に慣用されてゐる Konjunktur (景氣)なる言葉の代りに、彼れ自身の新たに鑄造した wirtschaftliche Wechsellagen (經濟的景況)なる言葉を用ひてゐる。『景況すなほも好況と不況とは、高度資本家的經濟の發展形態であり、これら兩者の對立的動力のもとに高度資本主義の發展が實現される』。中世の經濟形態は相當長い期間にわたつて靜止狀態を呈したものであるが、資本家的經濟においては不斷の運動がその本質であり、たゞ思惟においてのみ靜態として觀念しうるに止まる。さうしてそれは周期的なかつ自律的な一定の波動を描いて循環す

3) 期待さるゝ彼れの名著 „Die wirtschaftlichen Wechsellagen“ は、數年來の豫告にも拘らず、未だ吾々の机上を飾るまでに至つてゐない。

1) Spiethoff: Art. „Krisen“. l. c. S. 8.

る。「正常的」なのは好況でもなければ不況でもない。まして恐慌がさうでないことは、敢えて問題とするまでもあるまい。自由な、貨幣経済的な、高度の資本家的市場組織の常態は景況の循環である」²⁾。

高度資本主義時代以前においても、好景氣と不景氣との交替はあつた。しかし以前の景氣循環と今日のそれとの間には、彼に従へば、次ぎの諸點において重大な相違がある。第一に、前者にあつては現象は必ずしも一般的でなく不規則的であり且つ長期であつたに反して、後者においては一般的であり規則的であり且つ比較的短期である。が、それにもまして大切なのは、その原因が本質的に異つてゐる、といふことである。すなはち以前の景氣變動は、殆んど全く外的な諸事情によつて影響された。例へば天災、疫病、戦亂、收穫の豊凶、人口の増減、貴金屬生産の消長、世界航路の變更、經濟制度の變化等がそれである。もとより今日といへども、これらの諸原因が經濟生活の均等な波瀾なき發展を不可能ならしめてゐることに變りはないが、そこにはもつと有力な別の原因が作用してゐる。さうして自由なる高度の資本家的市場經濟が從來——英國においては一八二〇年代以後、ドイツにおいては一八四〇年以後——短期の約十年を一期とする比較的均等な波動を描いてきたのも、まさにそれに基づくのである。この新しき原因は、『經濟それ自體およびそれに特有な諸要素に根ざすがゆゑに』³⁾彼によつて inkäufige Ursache (内發的原因) と呼ばれる。かやうな經濟それ自體の内奥に根深い素因をもつところの、高度の資本家的社會における景氣變動の機構を分析してその内的諸原因を擧示することは、近代の景氣理論の、從

2) 1. c. S. 82.

3) 1. c. S. 82.

つてまたジュビイトホフの與へられたる課題である。そしてこの課題の性質に關する明確なる意識のもとにその解決を企圖する一序列の學説は、彼れ自身の言葉を藉りていへば、*inkraftige Wechselslehre* (内發的景況説)である。

一體、景氣の變動ほど複雑なかつ部分的考察を許さぬ事象は稀れであるが、かゝる複雑な事象の全體をその内的關聯において把握するには、まづもつて、特定の目的に照合して蒐集された事實を基礎として研究對象を確定することが必要である。すなはち吾々は、一見混沌たる諸現象の錯雜と多様の中から、決定的なものを副次的なものより區別し、規則的なものを偶然的なものより切り離し、かくして好景氣、恐慌および不景氣の各段階における特徴的な諸現象を確定しなければならぬ。ジュビイトホフはこの仕事を戰前半世紀間における主要諸國の景氣變動の歴史的・統計的分析に基づき、實に模範的に遂行した。そしてそれは、從來とかく缺乏がちであつたこの方面への新しい寄與として、充分尊重に値ひするものである。しかし、彼れの叙述を巨細にわたつて紹介することは、勢ひ廣大なる紙面を消費するがゆゑに、いまは差當り多くのものを割愛するのほかはない。吾々は次ぎに、過去の「歴史的經驗に即して」構成された標準的景氣循環の表式を掲げて、注目すべき彼れの所説の一斑を暗示するに止めよう。

不況 滯——資本投下、鐵の消費、鐵の生産、貸附利子の低下。

好轉の初期——鐵の生産、鐵の消費、資本投下の減少が止む、微弱なる上向運動の開始。

4) Löwe. l. c. S. 353.

5) Spiethoff, Art. „Krisen“, S. 38.

好轉の中期——資本投下(殊に株式への)の著増、鐵の消費が以前の大好況の絶頂に近づく。

好況——大好況——貸付利子の上騰。鐵の消費の激増。

資本缺乏——資本の調達難。資本投下の減少、高率の貸付利子、株式相場の軟弱、住宅建築の減少、鐵の消費の減退。

恐慌——信用の破壊、支拂停止の累増。

シュンビイトホフは好景氣を三期に分ち、不景氣を二期に分ち、それゆゑ好景氣、恐慌および不景氣よりなる一つの景氣時期を六段階に分つてゐる。これらの各段階に特有な諸現象は、右の表式によつて一應明かであると思ふが、特に好景氣の概念構成にとつて決定的に重要な現象とされてゐるものは、資本投下の増加および間接消費の増大であり、また不景氣の概念構成にとつてのそれは、資本投下および間接消費の減少と勞働力および生産設備の休止である。

さうして好景氣は、『つねに生産過剰にその自然的終焉を見出す、それはまさに不可避的である』⁶⁾。しかもこの生産過剰は規則的に間接消費財において頂點に達するのであり、それは、のちに詳細に述べるやうに、生産設備および耐久の利用設備への過度の資本投下に基因するものである。

さて好景氣は生産過剰の發生と共に必然的に不景氣に轉換する。そしてその場合には、時として突發的な暴風の瓦解に、すなはち恐慌に見舞はれる。けれども恐慌は、シュンビイトホフによる、過度の信用膨張と過度の投機のために好景氣がある不健康状態に陥つた際に起る現象であつて、好景氣の發展の中に恐慌の必然性が宿つてゐるわけではない。シュンビイトホフは恐慌を定義

6) l. c. S. 8.

して、『突發的な激烈な諸現象のもとに病的な經濟狀態の轉換が決せられるところの短時間』である、と云つてゐる。こゝに『病的狀態』といふのは、信用の膨張に伴ふ過度の投機のことであり、また『激烈なる諸現象』といふのは、信用の瓦解および支拂停止の累増のことである。『生産過剰と恐慌とは共に好況にその根源をもつ、しかし兩者は互ひに獨立である』。恐慌は、すでに生産過剰が發生して國民經濟が不景氣に陥つた時にはじめて襲來することもあれば、さうかと思ふと生産過剰の全然ない時に襲來することもある。恐慌は生産過剰に比較すれば、『國民經濟の内奥に由來することより少く』、むしろ表面的現象であり、それゆゑ『經濟的循環の外部にある』、と云ふことが出来る。要するに彼によれば、恐慌は必ずしも景氣と不可分離的な關係に立つものではないのである。

他方において彼は、恐慌と不景氣とを嚴密に區別する。⁹⁾『經濟的景況の洞察は、從來、不況を恐慌概念のうちに包攝せしめることによつて妨げられた』、しかしこの二つのものは、『異なる内容と異なる原因を有するがゆゑに、従つて兩者を截然分離することは、それらの説明の前提條件である』。かくて彼は生産過剰の二つの問題を規定する。彼によると、生産過剰には二つの範疇があり、そして兩者は嚴密に區別せらるべきものである。¹⁰⁾その一つは熱病的な緊張を示す好況に終りを告げしめ、かつ一般的經濟恐慌と普通に稱せられる現象の一部分を形づくる所のものである。彼は好況の反動たる慢性的ないはゆる不景氣の内容を體現する所のものである。これに對應して問題は自ら二つに分れる。第一は生産過剰の發生に關する説明であり、第二は往々數年にわ

7) 1. c. S. 9.

8) 1. c. S. 25.

9) 1. c. S. 10.

10) Spiethoff: „Vorbemerkungen“, u. s. w. 1. c. S. 722.

たる生産過剰の存続に關する説明である。前者は好景氣から、後者は不景氣から出發せねばならぬ。

以上、私はシュピイトホフの所説の最も基礎的な部分についてその大要を述べた。吾々はさらに、景氣循環の機構に關するより具體的な説明に向つて前進しなければならぬ。

吾々は次ぎの海路圖に従つて彼れのあとを趁はう。

一、沈滞の克服および好景氣の發生

二、好景氣の存続

三、好景氣の崩壞および生産過剰の發生

四、不景氣および生産過剰の存続

三 沈滞の克服および好景氣の發生

好景氣は資本投下の増大を意味し、そして資本投下の増大は物的ならびに人的の生産力の就業の増大となつて現はれる。それゆゑ好景氣の説明は、かくの如き現象を惹起する諸原因とそれを可能ならしめる諸條件とを明かにすることにゐる。

シュピイトホフによれば、景氣の『上昇運動の究極の原因は、何らか精神的なものであつて、經濟的なものではない』。好景氣の發生に關しては、まづ次ぎのことが想起さるべきである。すなはち、人間の衝動はいつも同じ強さで現はれるものではなく、それには浮沈がある、といふこ

とである。さうしてこの衝動の浮沈こそは、景氣變動を理解する『鍵』を提供するものである。人間の『衝動』は一定の表象によつて異常に刺戟されうる』。しかし、日常生活における通常のありふれた刺戟では、殊にそれが人間の基本的欲望に基づく場合には、特別の飛躍を招來するに足りない。恐慌に先立つ過度の投機はもろろん、好景氣もまた異常なる刺戟となるべき特別の表象を必要とする。特別の表象によつて煽られた營利心および企業心が一旦社會の敏感な人々を支配するど、やがて他の人々もそれに感染して、こゝに新しい一般的心理状態が成立する。かやうな人氣が社會の主導的な經濟關係に浸潤して次第にその熱を加へる一方、社會的經驗および經濟上の諸制度がそれを阻止しえないならば、その結果、過度の刺戟が起るのは當然である。それと共に單なる營利的努力は一攫千金を夢みる熱望に變じ、その目標に向つて盲目的に突進するやうになる。過度の投機はかくして發生するのである。

かやうな表象は如何にして生ずるであらうか。

およそ資本移動の標準は資本の収益である。従つて資本投下の旺盛となるのは、その種類の資本利用が従來よりもより大なる利得を提供することを前提とする。より廣大な範圍にわたる資本投下の刺戟となる如き表象の發生もまた、一定の事實的原因に俟たなければならぬ。それは、『固定的設備より生ずる利得と貸附利子との間に明瞭な開きが認められるに至つて』²⁾ はじめて可能である。これに反して、利得の見込がないならば、如何に原料や勞賃が安く貸附利子は低率であつても、それだけでは決して資本の投下を必然たらしめぬ。

2) 1. c. S. 70.

このこと、關聯してシュビイトホフは、おそらくはシムムベエタアの影響のもとに、資本の所有者たる資本家と資本の利用者たる企業者とを區別し、かつ財界の先達としての『大膽なる企業者』の役割を強調する。³⁾すなはち沈滞期の克服、好景氣の發生には、『大膽なる企業者』によつて喚び起された若干の企業なり産業部門なりが、利潤と利子の開きを出來るだけ明瞭にすることが必要である。かやうなことが全産業にわたつて行はれれば、資本は全産業に續々投下されるであらう。よしやそれが一二の企業に止まるごしても、何人の眼にも顯著なる成功によつて、各人相互の信認と企業熱とは大いに昂められるであらう。固定的な資本投下の標準を作り出すには、『所志の貫徹のために自己の財産の大半はおろか、往々その運命さへをも賭する、大膽な果敢な人物が必要である』。尤も彼等が資本投下および好景氣の『音頭取り』たりうるのは、彼等の事業が收益を齎らす場合に限ることは云ふまでもない。

さうしてシュビイトホフによれば、『好況は原則として收益財の群れから出發する。生産設備または耐久的利用設備は好況の原動力であり、脊髓である』。『收益財から出發した好況は、それによつて間接消費財が購入されるところの資本の投下の増大のうちに出發點および基礎をもつ。こゝからして運動は享樂財に波及するのである』。この見解はいはゞ彼れの宿論の一つであつて、從來繰り返し述ぶるところであるが、しかし何ゆゑに好景氣が收益財の領域から發生するかの理由に至つては、必ずしも正面から説明が與へられてゐるわけではなく、むしろ消極的な論據の上に立つてゐるやうである。彼れの考へによると、封鎖的と想定される資本家的社會においては、

3) l. c. S. 70.

4) l. c. S. 71 ff. 初期の論文には再生産的消費財なる言葉が用ひられてゐる。

5) 例へば、„Die Krisentheorien“, u. s. w. l. c. S. 690 ff.

6) Art. „Krisen“, S. 71.

『享樂財に端を發し且つそこで頂點に達する』好景氣を推論することは殆んど不可能である。けれど、『享樂財より衝擊を受けた好況は、資本の消耗か又は從來資本化された所得部分の直接消費にその原因を有する』からである。たゞ、他の國民經濟が享樂財を提供し、しかも交換に際して享樂財を欲求することにより、すなはちいはゆる外生的原因に基づき、享樂財より出發する好景氣の可能性を考へることは出來ようが、しかし『この種の歴史的事例はまだ知られてゐない』。

さて吾々はいまや、景氣上昇の理論における樞軸に、すなはち好景氣は不景氣の諸條件から自生的に、いはゞ有機的に發生するか、それとも動的循環の外部に存在する新しき契機の影響のもとに、それゆゑ非有機的に發生するかの問題に達着する。資本利得増大の主要源泉として新市場の獲得と技術的發展をあげる限りにおいて、彼は非有機的な外部的事情による衝擊を重視するやうに見えるが、しかし『不況は強烈な自己克服力を包藏する』と説く限りにおいては、決して有機的原因を看過するものではない。否な、彼に従へば、前者すら不景氣の産兒に外ならぬのである。なせなら、不景氣の壓力は新市場の探索および技術的進歩の助長にまで吾々を驅り立てるのである。だから、ところで不景氣の有する恢復力についていへば、『不況が齎らす影響のある種のもは、しばらく時がたつと初めとは別様に作用する』といふことが吾々にとつて重大である。『沈滞に續く好轉の初期はこれによつて助長される』例へば、不景氣に伴ふ物價、勞賃、貸附利子の低落は生産費の減少および利得の増大に導くが如き、あるひはまた最も劣弱な過剰資本化された諸企業が、不況の進行と共に整理され淘汰され若しくは合併されて、新しきより堅實な基礎の上に立

ちその健康を恢復するが如き、それである。しかし、『概していふと不況の恢復力だけでは不充
分である』。それは産業界の『音頭取り』にこそ強く作用すれ、他の大多數の資本家や企業者は別
の刺戟を必要とする。さうして企業者の活動を促し、資本家に投資の可能性を與へる積極的な因
子は、取りも直さず利潤の見込であつて、金融緩漫の結果たる利子歩合の低落でもなければ、物
價や勞賃の下落でもない。『資本投下の有力な衝撃は他の側から、資本の利用者たる企業家から
來なければならぬ』⁸⁾。

吾々以上において好景氣發生の第一の前提を見た。しかし、好景氣の本質である生産擴張の
實現は、それに必要な客觀的條件を俟つてはじめて可能である。それは何か。

資本家的生産のあらゆる端初および擴張は、物財および勞働力の存在を前提とする。同様に分
業的な貨幣經濟においては自由なる營利資本が不可缺である。營利資本の増投であり、國民經濟
上休止せる設備の活動的設備への轉換である好景氣もまた、それゆゑに、充分なる數量における
營利資本、勞働力、物的生産設備および物的滯貨を必要とする。約言すれば、所得の獲得にむけ
られた個人的財産である營利資本と今後さらに財の生産に役立つべき經濟財である生産資本とが
必要である。ところで不景氣のあひだ營利資本の一部は、その所有者に收益を齎らす點におい
て、私經濟の見地からは活動してゐると云へるが、しかしそれは財の生産および間接消費に資本
を提供しないのであるから、國民經濟の見地からは却つて休閑状態にあると云はなければなら
ぬ。そしてその主もな形態をシュビイトホフに從つて列擧すれば次ぎの如くである。⁹⁾ (一) 休閑中の

8) 1. c. S. 72.

9) 1. c. S. 72.

生産資本（銀行および貯蓄者の手許で貨幣形態をとるもの、企業者の手許で物財の形態をとるもの）、（二）銀行預金、（三）過剰に生産された商品滞貨の保持のための企業者に對する貸附、（四）外國で賣り放たるべき有價證券（資本の移動）。同様に生産資本の一部もまた休閒状態にある。（一）利用されぬ勞働力、（二）利用されぬ生産設備の生産力、（三）個人または銀行の所有にかゝる貨幣、（四）物財生産者または商人の所有にかゝる生産手段および享樂財）、（五）一時的對外輸出（その形態の如何を問はず、好況に際して再び輸入されるもの）。さうしてジュビイトホフによれば、すべてこれらのものは好景氣の客觀的基礎である。好景氣は自己の經濟的擴張に必要な諸條件を『みづから作り出すことは出来ない』。それは既存の諸條件を『發見せねばならぬ』¹⁰⁾。ただし、好景氣は『事實上』この基礎の上のみ成立するのであるから、従つてその説明もまたすべからず『この現實から出發せねばならぬ』といふのである。

これを要するに好景氣は上述の如き諸條件のもとにはじめて自己を實現することが出来るのである。